

燈 光



目次

・地域の親しまれる「赤ポーグ」	第一管区海上保安本部	交通部	2																									
灯台女子がレポートします！ 横浜北水堤灯台 点灯120周年	一般会員	不動まゆ	5																									
のぼれる灯台 introduction ☆野島埼灯台☆	燈光会事務局		11																									
春の叙勲と宮殿の絵画	普通会员	今村 辰機	15																									
同期会回想録	普通会员	山本 林	20																									
行雲流水の出台	普通会员	岩尾 亮二	27																									
連載 船頭重吉の太平洋漂流記（その九）	京都市在住	佐藤 節夫	32																									
「口唱法」の活用	石橋 正		42																									
平成28年度燈光会事業計画及び収支予算について	燈光会事務局		45																									
燈光会が行う共益互助事業について			56																									
<table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>〔燈〕</td> <td>〔光〕</td> <td>〔歌〕</td> <td>〔壇〕</td> </tr> <tr> <td>燈</td> <td>光</td> <td>歌</td> <td>壇</td> </tr> </table>	〔燈〕	〔光〕	〔歌〕	〔壇〕	燈	光	歌	壇	<table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>坂</td> <td>正直</td> </tr> <tr> <td>選</td> <td>選</td> </tr> </table>	坂	正直	選	選	<table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>櫻</td> <td>沢</td> <td>つ</td> <td>や</td> <td>子</td> </tr> <tr> <td>選</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>選</td> </tr> </table>	櫻	沢	つ	や	子	選				選	<table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>52</td> <td>50</td> <td>56</td> </tr> </table>	52	50	56
〔燈〕	〔光〕	〔歌〕	〔壇〕																									
燈	光	歌	壇																									
坂	正直																											
選	選																											
櫻	沢	つ	や	子																								
選				選																								
52	50	56																										
・のぼれる灯台参観者数（修正版）			14																									
・残波岬灯台と美ら海フォトコンテスト			43																									
・燈光会 新第一事業部長紹介			44																									
・会告（平成28年度定時総会議事録）			54																									
・灯台絵画コンテスト2016募集要項			60																									
・写真募集のお知らせ			61																									
・航路標識基数表			63																									
・叙勲受章者			64																									

・会員の入会	31
・慶 甲	41
・会務日誌より	62
・編集余滴	64

地域に親しまれる「赤ボーン」

第一管区海上保安本部 交通部

世界に通ずる国家建設に燃える明治期。

小樽港北防波堤は、そんな時代に日本初のコンクリート製外洋防波堤として築造されました。

そして、そのさらに先端に続く副防波堤の先に、赤く光るのが、小樽港北副防波堤灯台です。

G-10型コンクリート造のごく一般的な赤い防波堤灯台でしたが、ひよんなことから地域の皆さんに親しまれていることを知りました。

6月某日。

事務手続きのために訪れた小樽市役所にて、赤い羽根共同募金のコーナーを見かけました。

最近の共同募金にも、ゆるキャラ、ブームが押し寄せられており、地域のゆるキャラとコラボレーションしたイラスト入りピンバッジが、そのコーナーにも置いてありました。

小樽のゆるキャラといえば「おたる運がっぱ」。

「小樽運河が気に入って住み着いてしまったかっぱの男の子」ということですが、小樽市内の印刷会社で企画し、ツイッター等での情報発信から、地元国立商科大学とコラボレーションしてLINEスタンプまで製作するなど、地域でもなかなかの人気もの。

「へえ。赤い羽根もなかなか面白いことをするねえ。」と手に取った私の眼は、釘付けに！

なんとイルカに乗った運がっぱのバックには、光を放つ灯台のシルエットがっ！

即座に募金をして、件のピンバッジを頂きました。

地域に親しまれる灯台の整備・維持管理をする交通部ですから、一体、どの灯台を見ていただいたのか、どうして灯台をモチーフに取り入れようとしてくれたのか、気がになります。

というわけで、小樽市での赤い羽根の推進団体である小樽市共同募金委員会さんを経てデザインした小樽市内の「石井印刷」様に電話取材することに。

すると、デザイナードさん曰く。

「特にこれ、といった灯台は無いんですよね。」

『いつも見ていた○○灯台なんです。』という熱烈な答えを頂ける訳も無く、現実には厳しいものですが、次に出てきた言葉に救われました。

「赤ボー（防）ってことにしときますか（笑）。」

なんでも、2年前から始めた「運がっばピンバッジ」ですが、「港町小樽」らしいモチーフを毎回求められるそう、「小樽といえば港町。港町といえば海と灯台でしょ。」と、灯台をモチーフにしたとのことでした。が、うれしいのは、何の気なしに描いた灯台だったにも関わらず、本人から「赤ボー」という言葉が出てきたこと。そのことが「小樽港北副防波堤灯台」が「赤ボー」として市民に親しまれていることを物語っています。

小樽港北副防波堤灯台は、冬の日本海の荒波に耐えられるよう、今、正に耐波浪補強工事が行なわれている最中。

きっと全国にある小さな港町で、同じように昔から愛され、地域で大切にされている灯台が無数にあることでしょう。

そのひとつとして、「赤ボー」が今後末永く小樽の港のシンボルとして愛されることを、交通部職員一同、願うのでした。



小樽港北副防波堤灯台と運ガッパピンバッジ

赤い羽根共同募金 『おたる運がっば』

小樽限定!! 寄附金付きピンバッジ募金にご協力お願いいたします

小樽限定!!

2016



小樽市共同募金委員会は、今年度も『寄附金付ピンバッジ募金』を行うことといたしました。

平成26年度新しい募金のかたちとして始め、今年度3回目となります。小樽の街が誰もが住み良いまちに、もっと良いまちになるようお願いを込めて株式会社石井印刷様のご協力のもと小樽のご当地ゆるキャラ『おたる運がっば』ピンバッジを港町小樽!!をイメージして2種類製作しました。

どちらのデザインも小樽限定となっております!
今年度も多くの皆さまにご協力いただけると幸いです。

500円以上の募金でどちらか1個プレゼント!

(500円以上の場合、500円毎に1個プレゼントいたします。)

おちゃめで可愛い!&癒やされる『おたる運がっばピンバッジ』多くの皆様に付けていただけたらと思っております!

どちらも **数量限定** となっております!



★寄附金付ピンバッジ募金とは…

募金をしていただいた金額から製作費を除いた全てが募金となります。

※募金のため、おつりをお渡しすることはできませんのでご了承ください。

「赤い羽根共同募金」はどのようなことに使われているの?

☆小樽が誰もが住みやすく良いまちになるよう地域福祉活動に使われています。

たとえば…

社会福祉協議会による
地域福祉推進事業

- ボランティア養成・研修・相談等活動推進事業
- 自治会支援事業 など

団体・施設活動支援事業
(平成28年度助成)

- 第65回全道身体障害者福祉大会 小樽大会開催事業
- リトルママのお世話人形購入事業
- 放送用アンブ購入事業
- メンタルサポート事業
- 手話通訳養成事業
- 子ども職業体験プログラム「おたるワークステーション」 など

このほか全道・広域助成として地域福祉の推進や福祉団体・施設の活動支援、緊急災害支援準備金等に使われています。

《お問い合わせ先》

小樽市共同募金委員会

住所:〒047-0033 小樽市富岡1丁目5番10号
TEL:0134-22-6091 FAX:0134-32-5641



横浜北水堤灯台 点灯120周年

一般会員 不 動 まゆう

横浜港の重鎮！赤灯台

山下公園や赤レンガ倉庫から海を眺めると、裾広がりの姿が魅力の赤い灯台「横浜北水堤灯台」がよく見えます。明治29年に建てられた現役の中では最も古い

防波堤灯台であり、東京湾内で明治期に建てられた唯一の現存する灯台です。地元の方からは赤灯台の愛称で呼ばれ、横浜土産のデザインに使われるほど親しまれています。この灯台が2016年5月16日に点灯120周年を迎えました。



横浜北水堤灯台

灯台の存在意義や、海上保安部の活動を広く周知させることを目的に、マスコミを招いて灯台の参観が企画され、私は「灯台女子」として灯台内部をご案内いたしました。

灯台女子?!

灯台女子とはお察しの通り、灯台が好きで情熱を傾けている女性のことです。私は灯台マニア歴10年で、灯台の魅力を発信すべく灯台のフリーペーパー「灯台どうだい?」を2年前から自腹で発行しています。昨年、灯台ファンの女子会を開いたことがキッカケとなり「灯台女子」を名乗ることにいたしました。

私は強く想っていることがあります。100年後の海にも美しい灯台とレンズを残したい。灯台守の守灯精神を伝説のように語り継ぎたい。そのためには灯台の文化的価値を多くの人に知ってもらうことが第一歩なのではないかと。各地域の方々に自分の住む街の灯

台に愛着と誇りを持つてもらい、灯台が観光資源や文化財になり得ることを認識してもらいたい。そこから保全活動や次世代への継承につなげていきたい。フリーパーパー発行は個人的な小さな活動ではありますが、読んでくださる方も徐々に増えていて、最近はテレビやラジオ、雑誌でもちよこちよこ取り上げてもらえるようになりました。こうした活動が少しでも灯台魅力発信につながればと思っており、平日は大学職員として働いていますが、休日は灯台活動に有効利用しています。

今回、横浜海上保安部長のご発案で、案内役として灯台女子に白羽の矢が立ちました。この名誉な任務を大喜びで引き受けたことは言うまでもありません。



灯台どうだい？

一日海上保安部長として憧れの赤灯台へ

私はこれまでに数回、赤灯台の近くまで船で行くことがありました。京浜フェリーポートという横浜の観光船による灯台ツアーや、テレビ番組の収録時です。でも上陸したことはありませんでした。あの鉄板部分のリベットをもっと近くから眺めてみたい。できることなら灯室に入ってみたい。と強く願ったものです。これらの夢が今回すべて叶いました！さらに驚いたのは、この日は「一日

横浜海上保安部長」という大役を仰せつかったということです。私の他に、2人の灯台女子（磯部亜由美さん、平塚瑤子さん）に声をかけておりまして、彼女たちはそれぞれ「一日京浜港長」、「一日海上保安官」という任命となりました。（横



任命式

浜海上保安部長は京浜港長でもあり、且つ海上保安官でもあるそうです。

当日、横浜海上保安部の応接室に通していたと、机の上に制帽が置いてありました。おもわず歓声があがります。

「わあ！うみまる君やうーみんとお揃いになれる！」

任命式は10時から灯台見回り船「はまひかり」の前で執り行われました。憧れの制服に身を包み、これから乗船する「はまひかり」に興奮していたのですが、この任命式はマスコミにも公開されているため、ここで海上保安部の顔に泥を塗ってはいけないと、かなり緊張しながら敬礼をしました。じつは本番の前に横浜海上保安部 佐々木次長から敬礼の仕方、キビキビとした歩き方のご指導を賜りました。灯台女子だからといってダラダラした態度は容赦しないぞ！という熱血



記念撮影

指導だったため、ここで失敗したら怒られる！とすごく緊張していたのですが、本番の時は部長も次長も優しい笑顔で見守ってくださいました。

はまひかりに乗船！

船長の斜め後ろの特等席に座り、赤灯台を目指します。この日の天候は曇り。陸では感じませんでした。海上では風がやや強く吹いていました。防波堤へは飛び移る必要があるということで、我々に用意された制服もズボンでしたし、

足元もパンプスからスニーカーへ船内で履き替えました。当日取材に来ていたいたマスコミは新聞5社、テレビ局1社と盛況で、各方面からこの灯台が注目を浴びていることがわかりました。一緒に乗船している取材陣の中には船が苦手とい



はまひかりで上陸

う方もいて、揺れる度に遠い目をしていらっしやいましてが、船は数分で到着。重たいカメラを持っている方々も無事に北水堤に降り立つことができました。

赤灯台の内部

この灯台は高さ15mの4層構造ですが、建設当時、1層目に壁はなく、足がはえたような姿をしていたそうです。関東大震災以後、この下層部分を鉄筋コンクリートの壁によって補強されました。現在でも1層目には昭和49年から平成3年まで設置されていた発電機の台座跡や、それ以前に使われていたガスタンクをおいていた場所の跡が残っています。こうした内容や、石油ランプからガス灯器、白熱電球、現在のLEDと光源が移り変わった事について説明したところ、



当時の写真を持って説明中

取材の方々は興味深げに頷いていらっしやいました。

2層目に登ると、

明治の造りがそのまま残されていました。鉄造りの灯台なのに内装は板張りとなっていることに気がつきます。そしてさらに珍しいものが残っていました。「電波点消灯装置」のアンテナが出ていた部分の碍子です。この装置は遠隔操作によってガス灯器の点灯、消灯をすることができたようで、戦時中に使っていたとのこと。安芸白石灯標にもこの碍子がついていたことを想像させる穴があるようですが、こうして碍子が現在も残るのはこの赤灯台だけではないかというお話でした。



碍子の写真

ついに灯室へ

3層目の当直室は想像以上に狭く感じました。というのも分厚い鉄板の立派な螺旋階段が真ん中に設置されているからです。窓は大きく、美しい横浜港の景色が見えますが、嵐の日など、灯台守の方は心細い思いをされたのではないのでしょうか。

年代物の階段を上がっていくとそこは灯室でした。360度の横浜パノラマビューです。残念ながらバルコニー部分は鉄が朽ちていて外にできることはできませんが、室内からでも横浜東水堤灯台（相棒の白灯台）が以前立っていた場所を眺めることができました。いまは緑の灯浮標が変わりの役目を果たしています。この120年の間に灯室から見える景色も大きく変わってきたことでしょう。赤灯台はどんな気持ちで見守ってきたのかと想像しました。

レンズからLED灯器へ

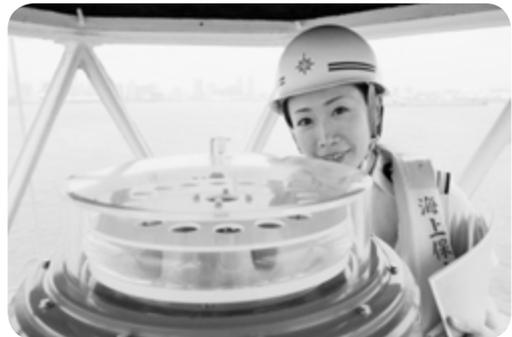
ここに第4等不動レンズが残っていたらもっともつと素敵なのに。（現在レンズは横浜海上保安部のロビーに展示）という気持ちはぬぐえませんが、LED灯器の照度センサーを手で隠してISO R 4s（等明

暗赤光 明2秒 暗2秒）を確認しました。この光は小さな

太陽光パネルの電力でもとすことができます。さらに長寿命の灯器とあれば、レンズから移り変わっていくことは仕方のないことなのかもしれません。でも灯台守が大切に磨き、守ってきたレンズのすべてを撤去することはないようにと私は願っています。

午後の対応

この日は午前と午後と同じ行程で予定が組まれていましたが、午後は潮位が高く、残念ながら北水堤への上陸は果たせませんでした。私たち灯台女子は、少しぐらい危なくても、オウンスクで上陸したい！と思っていたのですが、「危険を冒すことにはならない。」と



LED灯器

いう船長の英断がありました。灯台女子のひとりが、「船の上では船長が、総理大臣よりも偉いよね！かっこいい！」と興奮気味に言っていたのが印象に残っています。

取材の方々には船上で赤灯台についてのガイドを行い、そ

の後ベイブリッジの下に立っている横浜港外防波堤灯台などを見学していただきました。内部をご覧いただけなかったのは申し訳なかったのですが、たっぷりと質疑応答ができ、氷川丸係留棧橋の旧東水堤灯台沖までクルージングも楽しまれ、ご満足いただけたのではないかと思います。

おわりに

今回は赤灯台の内部を見学するだけでなく、マスクミの方々をご案内するという任務だったため、予め横



船上のご案内

浜北水堤灯台についての資料をいただき、勉強をすることができました。そのため通常の灯台めぐりよりもさらに充実した経験となりました。貴重な体験をさせてくださった横浜海上保安部交通課の皆さまに感謝の気持ちで一杯です。

灯台の魅力を広めるためでしたら、なんだってやりたい気持ちです！全国の灯台ファンの方々と力を合わせて頑張っていきたいので、どうぞこれからも灯台女子をよろしくお願ひ致します！



3人で敬礼

のぼれる灯台 introduction



今月は…

★ 野島埼灯台 ★

三浦半島と東京湾を囲む形で突き出ている房総半島、異国情緒の漂う白亜の灯台が白浜のシンボルとして建てられました。1866年、アメリカ、イギリス、フランス、オランダの4カ国と締結した江戸条約により建設を約束した8灯台（野島埼・観音埼・劔埼・神子元島・檜野埼・潮岬・伊王島・佐多岬）のひとつであり、設計者は、横須賀製鉄所雇フランス人首長フランソワ・レオン・ヴェルニー。当時、徳川幕府が海軍力増強のため建設を進めていた東京湾口に灯台を建設する必要に迫られていたこともあり、灯台の設置が急がれていたため、本灯台の建設に先立ち、木造四角櫓型の仮設灯台を建て、明治2年1月10日仮灯を点灯。本灯台はこのあと明治2年12月に完成、点灯。観音埼灯台に次いで日本で2番目に古い洋式灯台です。この灯塔は、大正12年の関東大震災で、基礎上約6メートルのところで折損、倒壊しました。その後、震災復旧工事が行われレンガの代わりに鉄筋コンクリート造で完成したのが現在の灯塔です。平成24年には、国登録有形文化財に選ばれており、平成31年には記念すべき初点灯から150年を迎えます。野島埼灯台周辺には沢山のお花が咲いており、花摘みが出来るところもあるそうです。季節のお花を楽しみに、そして灯台からの絶景を眺めにぜひ、訪れてみてはいかがでしょうか！

＊ ＊ 概 要 ＊ ＊

所在地	千葉県南房総市白浜町白浜630		
位置	北緯34度54分06秒 東経139度53分18秒		
灯質(光り方)	単閃白光 毎15秒に1閃光		
光度(光の強さ)	730,000カンデラ		
光達距離	17海里(約31キロメートル)		
高さ	地上～灯塔頂部	28.98メートル	平均水面～灯火 38.06メートル
塗色・構造	白色 八角形 コンクリート造		
レンズ	第二等二面フレネルレンズ		
設計者	フランソワ・レオン・ヴェルニー		
着工	明治2年2月14日	現在の灯塔	大正13年10月17日
竣工	明治2年12月18日	〃	大正14年8月15日
初点灯	明治2年12月18日		
参観開始	昭和29年9月13日		
アクセス	J R内房線 館山駅下車～安房白浜行き 野島埼灯台 下車		

♪ 野島埼灯台の思い出 ♪

いろいろな、歴史や館山の景色がみれてとても楽しかったです。(5年生男子)

海の音と一緒にみるって気持ちいい！(4年生男子)



★ 小学生編 ★

私は、はじめて灯台の仕組みをきらりん館で知り、灯台へのぼってそこからのながめはすごかったです。灯台が生きていたら朝日を眺めたり夜みんなを照らしながらけしきをみたりするのがいいーとおもいました。また来たいです。(3年生女子)

灯台の階段は77段*だったので、何かいいことありそう！楽しかったです。(6年生女子)

階段をおりるとき、段数をかぞえた。全部で101段*！つかれたー。展望台の景色はとってもキレイ！写真を撮りました！(6年生女子)

のぼっても、のぼっても、のぼっても階段ばかり。いちばん上につくとぜっけいかと思いきやつよい風。でも、すごかった！のぼったかいがありました!!(4年生女子)

*野島埼灯台の階段の数は…	
コンクリート螺旋階段	77段
鉄の階段	12段+12段
合計	101段！

結婚して初めての旅行!! すごくきもちいいところでいやされました。またこようね!(20代男女)

灯台に登ったり、歴史を見たり、沢山の事を知ることができました。レンズの仕組みが一番感動しました。また、自分の目でみて迫力を感じました。これからも守り続けて下さい!(10代女性)



★ 10代~20代編 ★

婚前旅行で、彼女と来ました。すごくいいところで満足できました。今度は、家族増やして来たいです。(20代男女)

灯台のように、誰かを照らせますように。誕生日の記念に2人で来ました。(20代男女)

船橋から自転車きました。とても美しい景色でした。(10代男性)

埼玉から乗馬をするために館山へきました。観光も兼ねてこの灯台にきました。あいにくの雨で景色はどんよりでしたが、水平線と飛行機と地球は丸くて海外とつながっているんだと実感。フランス人の彼氏と遠距離恋愛だけど、この灯台で海の向こうともつながっている気がしました。(30代女性)

人世最後の長い長い夏休みのような時間(産・育休)もあとわずか。おちびちゃん2人連れて最南端♪良い思い出になりそうです。また来ようね、娘たち！(30代女性)

10周年、家族も2人増えて、こちらに寄らせてもらいました。灯台のようにみんなを照らし導ける家族でいたいと思います。(30代男性)



★ 30代～ 40代編 ★

やっと、灯台の中に入れました。4度目の正直!! 眺めもよく、すばらしかったです。ここで4年前に告白した彼女と今日入籍しました!! 夫婦揃ってこれでよかったです!!(30代男性)

今年で9回目! 最初は、4歳の息子と階段を数えながら上がった灯台も9年目。今は10歳になった娘と上がりましたが、年々足が重くなり娘の方が早くたどり着きます。やっとのぼりきった階段の先は、毎年来てても絶景です。来年も来られれば10周年。我が家の記念日です。(40代女性)

生まれて初めて灯台に登りました。ここから朝日をみたらどんなに美しいだろうと想像しました。緑と花と陽光に包まれた美しい灯台でした。(40代男性)

群馬から主人と来ました。青空で、きれいな海に感動しました。灯台からのながめもすばらしく、地球が丸く感じることができました。海の安全を守ってくれる、人の心もいやしてくれる灯台に感謝です。海風でリフレッシュできました。又、仕事をしてお金を貯めてきます。(50代男女)

東京から来ました。昔は船の航行にとって灯台の果たす役割は欠かすことのできないもので、船員さんにとって灯台の灯りが何よりの救いだったのだらうと思います。今日は、私たちの心のあかりとなっています。海と灯台の景色を見るとホッとします。(60代女性)



★ 50代～80代編 ★

80歳誕生日に101段の階段が登れました。こんなすばらしいことはありませんでした。バンザーイ!(80代男性)

昨日、雨の中1人で静かに訪問。今朝は、大雨の予報が一転晴天で、妻を伴い灯台にきました。先月は城ヶ島の灯台、今日は、対岸の野島崎。海を守る灯台関係者に感謝します。(70代男女)

千葉県民ですが、20年ぶりに灯台に訪れました。灯台の階段は、少々きつく感じられましたが、眺めは最高でした。私は、海上保安友の会の会員なので、海上保安庁のビデオが見られて良かったです。ありがとうございました。(50代夫婦)

のぼれる灯台参観者数（修正版）

本誌5月号に掲載いたしました、角島灯台及び出雲日御碕灯台の参観者数に誤りがありましたので、ここにお詫びし訂正いたします。正しくは、下記の通りです。

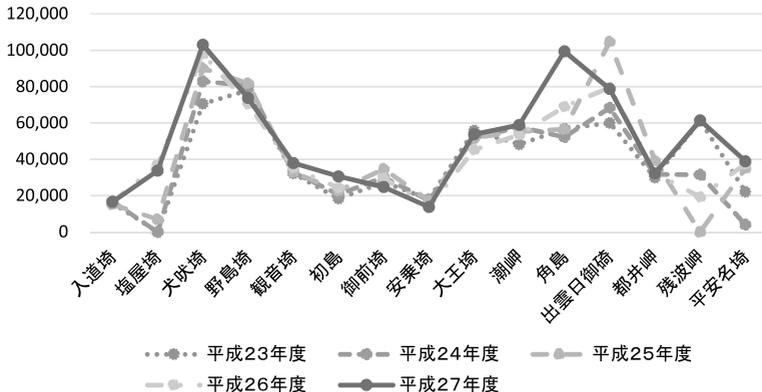
支所別・過去5カ年の参観者数推移（平成23年度－平成27年度）

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
入道埼	16,059	16,790	15,233	16,573	16,582
塩屋埼	0	0	7,039	36,923	33,796
犬吠埼	70,518	82,872	90,030	97,823	102,990
野島埼	77,966	80,576	81,808	70,378	73,721
観音埼	32,292	32,816	32,997	35,220	37,901
初島	18,427	20,707	22,675	24,304	30,605
御前埼	27,311	30,011	34,673	29,784	24,746
安乗埼	18,079	17,440	17,049	13,783	13,821
大王埼	55,786	51,804	51,793	45,257	53,694
潮岬	48,224	57,791	55,287	53,457	58,929
角島	56,790	52,182	56,518	69,063	99,426
出雲日御碕	59,963	68,235	104,627	79,521	78,639
都井岬	29,878	31,649	39,355	32,362	32,199
残波岬	61,407	31,588	0	19,355	61,397
平安名埼	22,055	4,017	35,069	37,561	38,851
計	594,755	578,478	644,153	661,364	757,297

特記事項

1. 入道埼灯台は季節参観となっており、平成27年度は平成27年4月18日から11月3日までの約6ヶ月であった。
2. 塩屋埼灯台は、東日本大震災により平成23年3月12日～26年2月22日まで参観を休止した。
3. 平安名埼灯台は、灯塔踊り場亀裂調査等で平成23年12月8日～平成25年3月8日まで参観を休止した。
4. 残波岬灯台は、平成24年度の台風17号による施設被害により、平成24年10月1日～平成26年11月30日まで参観を休止した。
5. 野島埼灯台は、水銀濃度が基準値を超えたため、平成27年2月13日～4月24日まで参観を休止した。
6. 安乗埼灯台は、工事に伴い、平成27年4月2日～5月28日まで参観を休止した。

支所別・過去5カ年の参観者数推移（平成23年度－平成27年度）



行雲流水の出会い

普通会員 岩 尾 亮 二

福岡県を中心として九州六県沖繩と、中国、四国地方の一部を購読エリアとします、西日本の中核紙「西日本新聞」は読者投稿欄「こだま」で戦後七十年の特別企画として「戦後七十年——次の世代への伝言」と題し、戦争にまつわる苦難等さまざまな意見、体験、を紹介しています。

その「こだま」の欄に、昨年、年も押し詰まりつつあった十二月のほど「灯台守の奮闘」の文字。

長年の職業的性と言いますか、広い新聞紙面の中で、「灯台」「海上保安庁」の文字には目が止まります。

退職十年を経ても、その姿勢は衰えていないようです。宮崎県都市にお住いのご高齢のお方の投稿で「灯台守の奮闘、戦後発展の礎」のタイトル。

重く、大きな視点の表題に思わず読み入りました。

「大きな視点」と言いましたが、現職の当時、私達の本音の思いは、心の奥の方で「海の安全を守っている」「沢山の方々の命に関わっている」「国の経済活動

の礎」を常に意識していましたし、遠慮と喜びと共に何度も読み返しました。

しかし、元燈台関係の仕事に席をおいた立場としては身に余る評価です。

映画「喜びも悲しみも幾年月」の原作者との出会い、私の勤務地の一つでもありました「都井岬灯台」での出来事。

幾重にも思い出が重なり新聞を切り抜きスクラップブックに納めました。

その後、年も明け、御屠蘇気分も抜けやらぬ、一月中ほど。

地元住民自治の役員会を終え帰宅しますと、「お父さん、お父さん」と家内が呼びます。

「テレビ、テレビ」NHK、BSプレミアムで「喜びも悲しみも幾年月」を放映しています。

何度も見た映画です。途中からです、やはり見入りました。

丁度、男木島灯台での悲しみの場面、退職し十年を経て古希を迎えた今、思いも違ってきています、見ながら目頭が緩みます。

次々と転勤を重ね、娘さんも成長、結婚して海外で

の仕事に赴く新郎と共に外国へ旅立つ娘夫婦。

その娘夫婦の乗った外国航路の客船を灯台の霧笛で送ります。

夫婦二人きりとなり、更に次々と各灯台への転勤を重ねます。

あるとき、灯籠の機械室で仕事についている主人公「有沢四朗」（佐田啓二）のところに灯籠の階段を昇ってきた妻「きよ子」（高峰秀子）が、これまでの転勤を重ねる中での出合と別れ出来事を夫（佐田啓二）に語ります。

回転するレンズの下、灯光の木漏れ日を浴びながら、夫、灯台守「有沢四朗」は、つぶやきます。

「行雲流水」去る人来る人……」。

映画を観終わり、西日本新聞「こだま」の「灯台守の奮闘、戦後発展の礎」を思い起こしました。

再度、スクラップブックを開き、読み返します。

『そうか、都城のご高齢の方と「喜びも悲しみも幾年月」の原作者の方の出会いは「行雲流水」の出合だったのか。

その出合での「灯台守の奮闘、戦後復興の礎」なのだ……」。

そうだ、「燈光」に紹介しよう」

これまで、気持ちの隅では「燈光誌に……いや誰か紹介するだろう……」何となく躊躇していた気持ちが「行雲流水、去る人来る人」で払しょくされ、その言葉に背中を押されて筆を取りました。

なお、転載につきましたは西日本新聞社の許諾を得ております。

戦争―次の世代への伝言

（平成二十七年十二月十八日、西日本新聞「こだま」欄掲載）

灯台守の奮闘

戦後発展の礎

新名 貞子 九十二

若いころ「喜びも悲しみも幾年月」の映画を見て、灯台守の方々が戦争中、いかに苦勞されたかを知り、涙、涙……の連続です。

この映画の原作を書かれた灯台守の奥さんが昭和三〇年ころ、宮崎・串間の私の実家に来られた。

娘が灯台のある都井岬から市内の高校に通学しよ

うにもバスは無く、日常も雨水をためての生活。間借りをし、自炊したいとの依頼だった。引き受けたら、戦争中の話になりました。全国の灯台を転々として、戦争末期は静岡・御前埼灯台に勤務。

海軍の上空監視委員が毎日交代で勤務し、緊急時には東京の大本営へ通報。

関東を空襲するグラマン戦闘機の搭乗員の顔が見えるくらい超低空でやってきて、歩く人を見たら機銃掃射の恐怖の日々。

灯台の灯を消してはならじと守り抜いた話を聞き、死を覚悟した灯台守の存在が戦後日本の礎になったと思った。

(宮崎県都城市)

昭和三十年当時、第十管区海上保安本部は発足しておらず九州全域が第七管区海上保安本部管轄下。

事務所も集約管理以前の都井岬航路標識事務所の時代。

当時の都井岬航路標識事務所は都井岬灯台、方向探知業務、無線方位信号所、正規気象観測、船舶気象通報等の幾つもの業務を所掌し、官舎(退息所)も灯台

併設のほか、灯台から離れた小、中学校の傍にも整備され子供を伴った家族持ちの職員は灯台へ通勤する、当時としては大きな事務所であったようです。

昭和五十年代半ば当時、第十管区海上保安本部灯台部在勤中、集約管理された串間航路標識事務所を訪問しました時、先輩職員の方から聞き及んでいました。

皆さんご存知のように都井岬は野生馬も息する地、交通の利便性はなく子弟の高校への通学は家族別居を余儀なくされたのでしよう。

当時は現在と違って高校に行く生徒は限られ、中学で就職する生徒も少なくなかった時代。

特に女子でその傾向が強く、ましてや間借りしてお母さんが同居して娘さんを高校進学させるようなことは稀であったことでしょう。

やはり、灯台の職場では、詩、俳句、短歌などの文芸活動が盛んであっただけに教育に対する意識が高かったことが伺えます。

また、先輩から伺った話ですが。

『燈台で暮らす中、所要で里に下りていきます。

用を済ませ灯台への帰り道、地元の皆さんから「灯台さん寄って行かれませんか、お茶でも」との交流は常だった。』

との事。

地域の方々は灯台守家庭に対して大変優しく敬意を持っていただいていたようです。

「喜びも悲しみも幾年月」の資料を紐解いてみますと、映画監督「木下恵介」氏は、映画完成時の記者発表資料で次のように述べられています。

『去年、「夫人倶楽部」に載っていた「田中きよ子」という灯台の奥さんの手記を読んで心を打たれ、この仕事にとりかかりました。

高嶺さんの役名を「きよ子」としたのも、田中きよ子さんに対する記念の気持ちからです。

一度も、お会いする機会がありませんでした。手記は短いものですから、モデルとか、原作と違うものはありません。

ただ、御主人が赤らちゃんを取り上げるエピソードと、二、三の言葉を会話に使っただけです。

その他、この映画の色々なエピソードは、ほとんど全部、燈台の方々から直接に、間接に聞いた実話です。』

(原文のまま、以下略、北九州シネマサロンのプログラムによる)

とあります。

監督の言われる、原作の中の二、三の言葉に、この「行雲流水」の言葉があったのか、それとも木下恵介監督が灯台職員へ取材される流れの中で脚本に自分の考えて書かれたのか知る由もありませんが、海の安全を守り、家族を守りながら転勤を重ねる灯台職員の後ろ姿に何かを感じ「行雲流水」の言葉が使われたのでしょうか。

子供さんの勉学のため御主人を官舎に残し、町中の高校近くの民家への間借り。

昭和十六年に燈台子弟のために燈台済育会の施設・制度が始まりました。でも全国津々浦々の地で仕事をし、生活する灯台守とその家族にとっては、想像を超える暮らしぶりがあったことが伺えます。

同時に人と人との出会いの中で深い交流も見取れます。

まさに、「喜びも悲しみも幾年月」の原作者「田中きよ子」さんと、新聞紙上にお気持ちを投稿されました「新名貞子」さんとの六十年前の出会い「行雲流水」の出会いであったでしょう。

私達の年代が海上保安学校を卒業し現地に赴きましたのは、お二人の出会いから十数年後の昭和四十年代

の半ば。

航路標識事務所の集約管理は進んだものの、まだまだ灯台に人の姿が見える時代であったと思います。

今では、人知を超える科学技術の発達で元で灯台の自動化は進み、人の介在が最少で海の安全が保てる時代となりました。

グローバル化した世界は、交通の時間距離も短縮し、今撮った写真がその場で相手に届く等、インターネットで瞬時に世界中とつながり出会わなくても情報交換ができる時代。

人と人との出会い、交流も違ってきているのでしよう。

退職し古希を迎える今、知力、体力に限界を感じながら、転勤で歩いた各地の出来事、人と人との出会い、交流等思い返しますと走馬灯のようにめぐりますが、ほんやりとしてかすみの中、少なくなつた記憶を辿ります時、これまでの出会い、交流がとても愛おしく大切に思えます。

私にとりましても新聞の投稿記事との出会はずまに「行雲流水」の出会いとなりました。

船頭重吉の太平洋漂流記（その九）

京都市在住 佐藤 節夫

第三章

三、カムチャツカの人と生活

カムチャツカの際は氷海に続いており、とても寒いところである。九月から翌年の四月まで、海一面が厚さ一丈ばかりも凍るため、船はまったく往来できない。五月になると、氷が解け始め、砕けた氷が風に吹き寄せられて一塊になり、小さな島のように海上を流れて行く。氷山は陸上の岩山よりも固いので、走っている船が衝突すると砕けてしまう。この海を船が往来できるのは六月から八月までの三カ月だけである。北アメリカから来航する船は銅板を張って船体を補強してあった。

好奇心が強く、社交性に富む重吉はこの地の観察に余念がなかった。日本人が道でオロシヤ人に出会うと、

彼らは一様に被り物を脱いで挨拶をし、どこの家へ遊びに行っても茶菓子などを出して歓待してくれた。これはルダカウの命令でそうしているらしかった。

十月頃になると、釣鐘も半鐘も凍てついて響かなくなり、大鐘はロンロンと低い音で鳴り、半鐘はチャチャとふざけるような音で鳴る。雪は三丈五、六尺ほども降り積もり、家々はその下に隠れて見えなくなる。煙が出ているのを目当てに訪ねて行くと、斧で雪を削って雁木をつけた家の入口に下りる階段がある。雪に埋もれて出入りができなくなるのを恐れてか、そのような階段は別にもう一つ設けてある。家は太い材木を積み重ねて作られ、所々に窓があつてギヤマン（ガラス）が張つてある。屋根も材木を並べて作り、その上に砂が三尺ほどの厚さに敷いてある。稀に板や茅を葺いた小さな家もあった。

屋内は板敷の床になつている。座敷の入口は一枚板の上下に羅紗を張つた左右の扉が中央から両側に開く

ようになってゐる。座敷の中には瓦焼窯のようなもの（暖炉）が設けてあり、その中で火を焚いて煮炊きをする。煙は屋根を突き抜けた煙突から出し尽くし、煙突の上には雪が降り込まないように蓋がしてある。火を燃やす口を塞いで、その周囲に開けてある穴から火気を座敷の中に出すと、真冬でも家の中は汗ばむくらいに暖かい。雪は連日降り続いて夜のうちに出入口や窓を埋め尽くしてしまうため、住人は毎朝外に出て斧で雪を切り払っている。

家々の屋根の上を道が通じている。外を歩く際には毛の付いたオレン（鹿）の皮で仕立てた雪合羽を着る。雪合羽は頭から裾まで一続きになっており、裾から頭を入れて着る。顔のところには穴が開いていて、額のところにミツベチ（熊）の胎内から取った小熊の毛が植えてあつて顔に雪が降りかかるのを防いでいる。手には皮手袋をはめ、足には水獣の皮で作った靴を履く。水獣の皮は水に濡れても伸びることはない。

長い距離を移動する際にはソリに乗る。カムチャツカではソリのことをサンカと称し、犬に引かせている。ソリは二本の木を縦に並べ、その上にこたつ槽のようなものを組み立てて真中を高くし、乗り手はその上に跨る。皮製の綱を五、六頭の犬に付けて引かせるので

あるが、必ず良い犬を先頭にして二列にする。後方の犬は悪い犬でもかまわない。四辻にさしかかった時、乗り手が「カツカツカツ」と叫ぶと犬は左へ曲がり、「ホガホガホガ」と叫ぶと右へ曲がり、「ヒロヒロヒロ」と叫ぶと直進し、「アーアー」と叫ぶと止まる。

乗り手は片方の端を尖らせ、もう片方の端に錫杖のように鉄の輪を付けた棒を持ち、木に衝突しそうになったり、片側へ寄りすぎた場合などには尖らせた棒の先で地面をこじつたりして進路を改める。犬が前に進まない時には棒を振り上げて鉄の輪をカラカラと鳴らすと、先頭の犬が走り出す。それでも犬が進もうとしないう時は、「エツカナイ（どろぼうめ）」、「エビヨーノマツ（いまいましい奴め）」、「ソバカ（犬）」などと叫び、棒で目の前の犬を叩くと先頭の犬は駆け出す。だから、先頭の犬はよく仕込んだ良い犬でなければならぬ。

ソリは人が踏みならして固くなつた雪の上を走るが、やわらかい雪の上に半分乗りかかると、横倒しになつて乗り手が落ちてしまう。それでも犬は構わずにソリを引いて行く。前を歩いている人がいればソリを止めてくれるが、いない場合にはソリが行方知れずになることもある。また、ソリが下り坂にさしかかった時には、乗り手は持っている棒を前に突き立てて進み

過ぎないようにする。

一軒の家でも、これは誰の犬、あれは誰の犬というように、各人が餌を与えて飼っている。犬の餌はセリジ（ニシン）で、一度に五、六匹与える。遠方へ出かける場合には、前夜に八、九匹ほど与え、当日は目的地にたどり着くまでは何も食べさせない。そうすれば、犬は早く到着して餌を食べさせてもらおうと道を急ぐからである。犬を飼っていない者が遠方へ行く時には親しい人から犬を借りる。犬を借りる人は前夜にセリジを持参して犬に与える。カムチャツカの西方のイチカヤキギリでは、犬の代わりにオレン（鹿）にソリを引かせているらしいが、重吉は見えていない。

トロハ（薪）を集めに行く時にもソリに乗って行く。この場合、木をたくさん積めるようにソリを大きく作り、乗り手は積み上げた木の上に乗る。このようなソリをナルタと呼んでいる。犬を飼っていない者は雪の上を歩いて薪を日本ずつ引いて進む。氷が解けると薪集めはできないから、この仕事は専ら雪のある季節に行っている。重吉がカムチャツカに到着した直後の八月頃に山へ登った時、あちらこちらに木を伐ったあとが残っているのを見た。それらの木はすべて幹の中ほどから伐ってあり、根元から伐ったものは一本もなか

った。重吉はその時には不思議に思ったものだが、後になって雪が降り積もっている時期だけ木を伐るため、雪が解けると中程から下の部分だけが残ったのだと知った。

カムチャツカの草木は日本のものと異なるものが多い。ボソレツカというところの川辺には木賊（とくさ）がたくさん生えていたが、これは日本のものと少しも変わらなかった。蓬（ヨモギ）も日本のものと同じである。それ以外の草木は見慣れないものばかりであった。松はすべて四つ葉で、松笠は大きく、その種子を煎って子供たちが食べていた。日本という朝鮮松の類であった。

カムチャツカでは米をフナと称し、これを炊いて飯にしたものもフナと呼ぶ。米は広東あたりから輸入していた。広東では二カ月で米が実り、まずその穂を摘み取り、再び穂が出て実るものを摘み取るので、一年に二度米が収穫されるのだと重吉は聞いた。その米を見せてもらったが、細長くて小さな粒で、日本で糍（しいな。実の入っていない米）と呼んでいるものに似ていた。カムチャツカでは格別の祝いの日にだけ米を固めの粥のように炊いて食べ、ふだんの日には小麦の団子と獣肉だけを食べていた。小麦団子の生のものをヒレ

フハンまたはヒレツパと呼び、感想したものをワハクと称する。

翌年、重吉が日本へ帰る頃、カムチャッカで知り合った水主たちが言った。「お前が四、五年故郷にいなかった間に、きつと牛はたくさん増えていることである。あまり食べすぎないようにしなさい」「どうして牛を食べるのか？日本人は牛を食べない」重吉は言った。「牛を食べずに日本人は何を食べているのか？」水主らは尋ねた。「毎日米を食べて暮らしている」重吉が答えた。「毎日米を食べている国があるとは嘘を言うにもほどがある」水主らはそう言って笑い合い、重吉の言葉を本気にしなかった。「カムチャッカでは食べ物に不自由しているので、日本と交易ができれば私たちは苦勞をしないですむ」下々の者がこう話しているのを、薩摩の喜三左衛門も時々耳にしていた。

カムチャッカではカレイをカンバラと呼ぶ。日本の石ガレイを大きくしたようなもので、体には亀の甲羅のような固いものが付いている。重吉はシトカでも豊三枚ほどもあるカレイ（オヒヨウ）を食べた。その身はたいへん軟らかかったが、これというほどの味はしなかった。

重吉はカムチャッカに来た当初、言葉が通じないこ

とに苛立った。彼がその場にあるものを指で示し、「これはなんというのですか？」と尋ねても、相手は申し訳なさそうな顔をするばかりで、何を問われているのかわからないようであった。ある時、オロシヤ人が物を出して「カクナ」と尋ねてきたので、「カクナ」とは「何か」の意味だと重吉は気づいた。それ以降、重吉は紙と筆を持って歩き、様々な物を示して「カクナ」と尋ね、その意味を日本語で書き、その下にオロシヤの言葉を記した。こうして彼は様々な物の名と意味を覚えていった。少しずつオロシヤ人と話を通じるようになる、ますます言葉の習得が楽しくなり、毎日彼は外出して誰彼となく話しかけた。

重吉がオロシヤ人の家を訪問し、「ドブラ、ゲン、ドロマ、ダラシ（今日は良い天気だ。どうしていますか？）」と言うと、相手は「サラシ、サラシ（腰を下ろしなさい）」と答えて曲衆（きょくろく）のような物すすめる。こうして重吉は大抵のことはわかるようになったと思っても、時にはまったく話が通じないこともあった。ある時、その家の主人が色々なことを言ってきたが、重吉にはさっぱり意味がわからず、黙っていたことがあった。すると、相手は「テルセルゼーススカゼガウリン」と何度も繰り返した。これも何

のことかまったくわからず、重吉はそのまま帰ってき
た。それからしばらくして、重吉は「テルセルゼース」
とは「何か腹を立てているのか」、「スカゼ」は「話」、
「ガウリン」は「物を言わない」という意味で、「何に
腹を立てて話もせず、物も言わないのか」と聞かれて
いたことを知った。また、ある時、魚がなくなったの
で、「モヤ（私）、ドン（家に）、イレバ（魚）、リクセ
ン（尽きた）。ソーニダバエランナ（今くれますか）」
と重吉が言うと、相手は「ランナ、ランナ、オシメ（わ
かった、わかった、くれてやるう）」と答えて魚を差
し出してくれた。重吉は「オコンノダイウダイ（あり
がとう）、ボロツシヤエ、ボロツシヤエ（さようなら、
さようなら）」と言って魚を持ち帰った。

「テウオロボダイ（何の仕事をしているのか）」と聞
くと、「オルバカマセイ（裨褌を縫っている）」と答え
る。「ニテウ」は「何もしていない」という意味である。
「モイ」は「洗う」、「湯に入って行きなさい」は「バ
ニヤモイ」と言う。「スカゼ」は「話」で、「昔話」は
「スカスカスカゼ」という。オロシヤ語は言葉の始め
に「ナア」と付けることが多く、「船」は「スーナ」
であるが、「ナアスーナ」と言ったりする。

女の名前の後ろには「ヒヨードロノハノブナ」と付

ける。日本で女の名前の前に「お」を付けるのに似て
いる。「ヘクラヒヨードロイハノブナ」「アブドツチラ
ヒヨードロイハノブナ」などという女性名は、ふだんは
「ヘクラ」「アブドツチラ」と呼ばれている。

数は「オジン（一）」「ツワー（二）」「テレー（三）」
「チエテレ（四）」「ビヤーチ（五）」「セーシ（六）」「セ
ン（七）」「オーセン（八）」「デビチ（九）」「テセツ（十）」
「スト（百）」「デーセヂヤ（千）」「デヤテーセヂヤ（万）」
と数える。

笑うことと泣くことは万国共通である。日本では「は
いはい」と返事するが、カムチャッカでは「エシエシ」
と答えていた。「日本は小さい島国であるが、神国だ
から軽々しく手出しをしてはならない」と、重吉はオ
ロシヤ人があちらこちらで言っているのを耳にした。

日本では大晦日に生まれても年が明ければ数え年の
二歳になるが、カムチャッカの者に年齢を聞くと、誕
生日から数えて「今日は二十三歳と五十二日になる」
などと答える。この国には閏月はなく、一周年は日本
と同じであるが、一月を様々に数え、二月で五十日の
場合もあれば、三月で百日の場合もある。

重吉はルダカウのところ極めて詳細な日本地図が

あると聞き、オンデレイハンに内々に頼んで見せても
らった。それはとても大きな絵図で、その鮮やかな色
彩と細やかさに、重吉は驚嘆した。薩摩の喜三左衛門
もこの絵図を見ていた。「絵図を初めて目にした時、
薩摩国の何という村であったか、わしが一度も行った
ことのない土地であるのに絵図には詳しく描かれてい
るので度胆を抜かれた」と語った。

冬の夜、アザラシは氷に穴を開けて海の中から出て
くる。穴はたちまち凍って塞がり、アザラシは海中に
戻ることができずに夜が明けると氷の上を這い回って
いる。この土地の人々はそれを追い回して棒で叩き殺
すのである。重吉はその様子を見物に行き、アザラシ
を哀れに思うと同時に恰好の気晴らしにもなった。

三月になり、切支丹の本尊の祭りかと思われるもの
が開かれた。人々は祭りの二、三日前から肉食を慎ん
で精進し、当日は寺の前に集まる。そこへ代官のルダ
カウがやってきて、皆の口をなめる。重吉も祭りを見
物に行ったが、誰彼となく人が近寄ってきて口をなめ
るのに閉口してすぐに逃げ帰った。それから三日間ほ
ど、彼は外出をひかえた。

四月に再び祭りが催された。今回は七日ほど前から
精進し、当日は寺で大きな半鐘と小さな半鐘を一日中

打ち鳴らしていた。この日は町中総出で雪舟（ソリ）
遊びが行われた。重吉はこれも見物に行った。

当地の山と山の間に幅十間ほどの細い入江がある。
この季節でも山には雪が降り積もって凍り、入江も厚
い氷に覆われている。両方の山頂から麓の入江まで、
とつともなく長い板橋を山に沿って梯子のようにつ
かしておくと、一夜のうちに雪が降り積もって凍りつ
く。それらを平らに削って滑りやすくしておくのであ
る。

この日、ルダカウはかろうじて自分一人が乗れるだ
けの雪舟を山頂まで持つて登り、その雪舟に乗って板
橋の上を一目散に滑り下りた。そのあとで、町中の男
女が両方の山頂から次々と雪舟に乗って滑り始めた。

一方の山頂から滑り下りた者が勢い余って向かい側の
山の麓まで滑って行く。時には両方の山頂から滑り下
りた者同士が衝突することもある。何かの拍子に板橋
の途中で雪舟が横に傾き、トンボ返りをして横向きに
滑り落ちるのを重吉は見た。酒に酔った数人の若い男
が牛皮の上に女を同乗させ、三味線のようなものを弾
きながら滑り下りて行く。何かに接触して横倒しにな
り、男と女が転び落ちることもあった。麓から頂上ま
では半時ほどかけて登らなければならないが、それも

たった一度滑り下りるためだけなのである。この日の祭りはたいそう賑やかで、雪舟の滑降は重吉を大いに楽しませてくれた。

祭りの日以外でも、村人は女子供を連れて山に登って雪舟遊びをしている。雪合羽を着て手袋をはめ、靴を履いて滑るため、減多に怪我をすることはないらしい。何が面白いのかと重吉が聞くと、村人は高いところから滑り下りて穴の上を飛び越えて向う側に落ち、そのままの勢いで滑って行くところだと答えた。祭りが終わってから七日ほどの間、綱で木を吊り下げたものに人が乗ってゆらりゆらいと揺れていたが、重吉には何故そうしているのかわからなかった。日本にも古くからぶらんこはあったが、彼の故郷にはなかったらしい。

カムチャッカでは妻に間男がいても、夫はさほど不愉快に思わないという。しかし、未婚の娘が密通すると、親は娘が傷物にされたと思つて憤慨する。妻が密通しても、相手の男から妻に何かと物をくれるので、夫も良いことのように思うらしい。夫の方がそれで納得しているなら、妻も蜜夫も夫を邪魔に思わないので、殺してやろうとも考えず、また妻が蜜夫と駆落ちをすることもない。妻が蜜夫の子供を産んでも、夫は自分

の子供として大事に育てるのだと、重吉は聞いた。

この国ではどれほど不満があろうとも、一度夫婦になった以上は離別は決して許されない。そして、国王や貴族や大金持であろうと、妾を持たない。貴人だからといって妾を多く抱えれば、必ず障害が出てくる。また、子供がたくさんいると、出費が嵩んで生活が苦しくなる。そうすると、百姓を苦しめなければならなくなる。上の者は下の者に情けをかけ、下の者から上の者が情けをかけてもらうことを恥としているので、下の者を苦しめないようにとの配慮から、たとえ国王であつても妾を囲わないのだと、重吉は思った。

カムチャッカでは村ごとに病人を治療する家が設けてあり、病人はだれでもそこで治療を受けることができる。その費用はすべて国王が負担するらしい。それ故、病氣になつても命を助けてくれるのは国王であるとして、国民は国王を深く尊敬している。医師は治療した病人の数によつて住み良いところへ移され、国王からもらう給与も増えるので、治療に力を尽くすようになり、自然に名医が多くなる。こうして、子供であつても朝起きればすぐに都の方に向かつて国王を拜むのである。

ルダカウの屋敷から少し離れた場所に、彼が預かつ

ている宝蔵があった。宝蔵の正面はたいそう長く、入口には時計がかけてあり、その下に番人がいた。番人は近在から代わる代わる出てきて役を勤めていた。

ある時、ルダカウが尾張船の三人にそこへ行って遊んで来いと言ったので、三人は喜んで出かけた。ところが、番人は三人が宝蔵に入ることを許さなかった。

「代官に許されて来たのだ」重吉が言っても聞き入れてもらえず、番人は三人を口汚く罵って追い返した。

「どうして我々を宝蔵へ行かせて番人に罵らせたのですか」帰ってから重吉はルダカウに訴えた。すると、ルダカウは驚いて「これは私の誤りだ。どうして私がお前たちを欺いてそんなことをすることがあるうか。おれは番人の心得違いである。どうか許してくれ。許してくれ」と謝った。

次の日の朝、三人が起き出した時、ギヤマン（ガラス）の窓からルダカウが急ぎ足でやって来るのが見えた。三人はこれほど朝早く代官が訪ねて来たことに驚き、あわてて着替えをすませた。ルダカウはすぐに三人を表へ連れ出した。三人は何事が起きたのかと思つて外に出てみると、数人の役人が前日の番人を連れて来て赤裸にするのを見た。そして、その男の背中を柳の枝を束ねた物で激しく叩き始めたのである。「許し

て下さい、許して下さい」番人は重吉たちに向かつて泣き叫んだ。「彼はいったい何をしたのですか？」重吉は驚いて代官に聞いた。「昨日あの男は心得違いをしてお前たちを怒らせたからお前たちの虫がおさまるまで叩いてやるのだ」ルダカウは言った。「どうか止めて下さい」三人は番人の方に走り寄り、両手を広げて役人が叩くのを止めさせた。「それではもうお前たちの腹の虫はおさまったのか？」ルダカウが重吉たちに聞いた。「あの時は腹も立ちましたが、そのために番人がこれほど厳しく罰せられては気の毒でなりません。今となつては昨日恨みを言ったことを後悔さえております」重吉は言った。「それでは本当に恨みもなくなり、心が晴れたのだな？ 本当にそうなのだな？」ルダカウは何度も念を押してから番人を解放してやった。

次の日、重吉らの家に番人が訪ねてきた。尾張船の三人は顔を見合わせ、「昨日我々のために叩かれたので、きつと恨みを言いに来たのだ」と言い合い、番人を家に入れなかった。「どうか私を中に入れてください。昨日のお礼を言いに来たのです」番人が何度も頼んだので、三人は戸を開いて家の中に入れてやった。「昨日のお礼に酒を持って来ました」番人は笑顔で言

った。重吉たちはますます彼を気の毒に思い、「それほどのことではない」と答えて酒を辞退した。「それではまだ私のことを恨みに思っているのですね。残念なことだ。私はまた役人たちに叩かれるだろう」番人はそう言つて肩を落とした。それを見て、三人は彼の好意を無にする訳にはいかなくなり、酒の肴を出して番人が持参した酒と一緒に飲んだ。やがて番人は大喜びで帰つて行つた。

ある日、重吉が外出から戻る途中、近所の子供たちが寄り集まつて氷柱を手にしてふざけていた。そして、一人の子供が犬に向かつて氷柱を投げ付けた拍子に重吉の額に氷柱が当たつた。重吉は子供がしたことだから怒りもせず、そのまま帰宅した。すると、次の日その子供の母親が訪ねてきて、すぐに息子を裸にして続け様に強く叩いたので、息子は重吉に謝りながら泣き叫んだ。「どうしてこのようなひどい仕打ちをするのですか？」重吉が母親を問い詰めた。「昨日息子はあなたの額に氷柱を投げ付けたのだから、あなたの気がすむまでこうしてやるのです」母親はそう答えて息子を打ち続けた。重吉は番人の時と同じだと気づき、「私は少しもこの子を恨んではない。幼い子供が誤つてしたことに何の恨みがあるうか。どうか叩くのを止め

てください」と何度も繰り返した。すると、母親は「それではうちの息子を許してくれるのですね？」と念を押し、喜んで子供と帰つていった。それからすぐに鹿の股肉を持参し、何度も重吉に礼を述べた。

この国の人々は恨みや怒りを抱えていることを嫌うのだと重吉は思った。だから喧嘩をすることもないのだろう。たまたま喧嘩が始まつたとしても、二人の間に入る者があらわれて互いの言い分を聞き、少しでも非の多い者を相手のところへ連れて行き、番人や子供にしたようなことをするのである。幼い頃からやり慣れている方法だから、負けを惜しむことなく、自分の非を知つて相手の腹の虫がおさまるまで打たれるのである。人々が相手の口をなめる行為も、心の中にわだかまりがないという誓いのしるしなのに違いない、と重吉は思った。

ある時、重吉に砂糖をくれた者がいたが、それはたいそう質の悪い砂糖であつたから、「このようなものが食えるものか」と重吉は言つて投げ返した。「それならば水主たちにくれてやってくれ」相手の男は言つた。「自分が食えないものを他人に食わせられるものか」重吉はそう言い返して背を向けた。すると、相手の男はその砂糖を自分の家に持ち帰り、別の上質の砂

糖を重吉のところへ持ってきた。

重吉はこれまで各地を巡ってきて、人と争って憎まれたならば殺されるかもしれないと思つたこともあるが、だからといって相手の言いなりになつて弱い態度を見せていると、日本へ帰してくれないだろうと考え、できる限り相手の機嫌を取りながら、時には大和魂を發揮して気丈なことも言つた。

カムチャッカでは、代官が通行する時には人々が両足をそろえて両手を脇に当てる礼儀正しく立っている。日本のように道路脇で土下座をすることはない。出家はポフと呼ばれ、髪もひげも剃らず、たいてい筒袖より少し大きな衣服を身につけている。出家は道で人に行き合えば、相手が子供であっても立ち止まつて額と両肩の下と胸へ手を当てる礼拝し、相手が手を重ね合わせて差し出すと、おの手の上に自分の手を乗せてからその手をなめて立ち去る。神仏のようなものもポフと呼ばれ、獵虎（ラッコ）のことをポフラと呼ぶので、名前を混同しやすい。

(以下次号)



「口唱法」の活用

石橋 正

私は長い間（昭和14年から）、「流れ星」の観測を続けて来た。昭和21年には「蛇つかい座アルファ流星群」を発見し、天文学会に記録された。現在は色々な光学機械で観測されるが、最も難しかったのは流星の光った継続時間の測定であった。

「口唱法」とはその時に使う手法で、5秒間に「アイウエオ」がどの位言えるか、である。5文字言えたら光った時間は1秒、「アイ」の2文字で消えたら0.4秒である。この訓練に習熟していたお陰で、船乗りの時代私は灯台の光が何秒に一闪するのか、ほとんど正確に知ることが出来た。小さなフレアを見つめるだけで、その灯りがどこの灯台か、誰よりも早く知ることが出来たのである。

私は船長時代、航海士にも練習学生にもこの方法を教えた。嬉しいことにみんな興味を持ってくれて、卒業後「乗船した船の中で鼻高々であった」と報わせて来た教え子も多い。

私はこの方法を昨年、「飛鳥」の日本一周で灯台の話をした時に乗客に教えたが、何人かの船客が興味を持ってくれた。その人達は一生懸命練習して正確に言えるようになり、灯台が見えると早々にどこの灯台か調べ、友人達に自慢している、という姿をよく見かけたものである。

余談になるが、「口唱法」は以前、レールの継ぎ目の音を数えて列車のスピードを測ったり、「脈」を診るときにも活用していたものである。

残波岬灯台と美ら海

テーマ①: 残波岬灯台 テーマ②: 美ら海

フォトコンテスト



(※掲載写真：平成27年入賞作品)

【募集期間】平成28年6月20日(月)～平成28年9月20日(火) 必着

【テーマ】① 残波岬灯台：残波岬灯台が被写体に含まれ、残波岬の魅力を伝える作品

② 美ら海：読谷村周辺の海で働く人々、船舶、マリンレジャー等を題材とした美ら海の魅力を伝える作品 (サブテーマ：①安全 ②自然(環境の保全))

【応募形態】プリントまたは画像データ

【応募方法】①作品のタイトル ②応募テーマ(残波岬灯台or美ら海) ③作品のコメント ④撮影場所 ⑤撮影時期
⑥氏名 ⑦年齢 ⑧住所 ⑨連絡先(電話番号・E-mail)を応募用紙に記載し、プリントの場合は作品の裏面に貼り付け、データの場合は添付し応募して下さい。

【応募先】持参又は郵送の場合：那覇海上保安部交通課あて

〒900-0001 沖縄県那覇市港町4-6-5 TEL098-951-3855

Eメールの場合 zanpa-toudai@yomitan.jp

※詳しくは、 **那覇海上保安部** **検索** でチェック!!

船舶事故・海浜事故に遭わないために！(詳しくは那覇海上保安部ホームページへ)

- 海で遊ぶ場合は、事前に天気(気象・海象)の情報を確認し、悪天候が予測される場合は、中止する勇気を持ちましょう。
- 船舶事故
 - ・ モーターボート船長は、運航前に発航前点検の励行をお願いします。
 - ・ シーカヤック所有者は、天気にご注意するとともに、船体管理の徹底をお願いします。
- 海浜事故
 - ・ 水遊び遊泳では若年層及び高齢者の事故が増えています。父兄の監護等をお願いします。
 - ・ シュノーケリングでは、正しい技術の習得、ライフジャケットの着用をお願いします。



燈光俳壇



坂 正直 選

東京 山本 五風

往く春や仮設住宅早や五年

評 東日本大震災に見舞われてから早くも五年。仮設住宅は家を失っても幸い助かった人たちの住んでいる施設である。そこから抜け出せない状況の方々がまだ居られるわけで、「往く春や」に同情切なるものを感じる。

牛蛙ダークダックスもういない

評 ダークダックスの喜早哲さん（愛称ゲタさん）が最近亡くなられた。牛蛙の鳴声からゲタさん歌唱に思

い当たったのだ。「もういない」は彼らの長い活躍を懐かしみ、悼むにふさわしい言葉である。

渡船場の風見は鯉の吹流し

評 かつては生活航路であった渡し船は消えるものは消え、残っているのは観光の渡ししかない。この句の

発見は、渡船場に風見用の旗ではなく「鯉の吹流し」を発見したことである。五月の節句ごろの好天も伝

え得ている。

ヨット統ぶオーナー然と同級生

評 友人がヨットと同乗者を指示してヨットを自在に走らせている姿を見て、「もう奴はオーナー気取りだ」とその同級生を誇っているのである。

対岸へ卯波八丁渡し舟

名古屋 豊藏 十四三

夏待てぬサーファー乗せる卯波かな

評 俳句は、季語は一つが望ましいと言われているが、

読む目的からそうはいかない場合がある。この句は五月の風「卯波」を詠みたいのであるが、初夏らしい卯波を伝えるに「夏」も「サーファー」も不可欠だった。

青き空に白き燈台風薫る

評 「風薫る」の季語は、連歌時代に初夏の風と意識さ

れたもので、元々は和歌で花や草の香りを運ぶ春風

だったという。その意味から「青き空に白き燈台」はこの季語にふさわしい。

威信かけ首脳を護る五月来ぬ

評 伊勢志摩サミットが5月26日27日に開催され、無事終了したが、その警備は困難を極めたものと想像される。その任に当たつての心意気が伝わってくる詠みである。

母の日や母は病の床に伏し

評 病床に伏して「母の日」を迎えるとはそのお祝いを考えていた子供達が残念がるのは当然であるが、母自身も申し訳ないと思つていふことと思う。

万緑の波に鯨銚跳ねる如

南さつま 坂本 さだを

薰風や鯉幟の太き胴

評 鯉幟は初めて聞いたので調べると、鯉の水揚げが盛んな枕崎で端午の節句に縁起物として揚げられるという。その姿の特徴は鯉幟と一味違つて「太き胴」にあるらしい。

車座でチームのお昼五月晴

評 チームは野球かサッカーか野外スポーツのチームであろう。それが車座になつて昼食をとつているとい

う。「五月晴」が明るい雰囲気の一団を想像させている。

奥山の裾野に続く青田かな

評 先日、千葉房総の千枚田を尋ねて行つてきた。こんな山間によく作つたものだと感心したが、この句も似たような景色かも知れないと思つた。

雀蜂唸りて堂々たる哨戒

芝の花ホールインワンの球に添い

近 詠

坂 正 直

奈良朝の礎石に荒き夏の雨
ヨットの舵握るや湧き来見張り術
緑蔭の長蛇は若冲展へ伸び

兼題

天の川・西瓜・その他当季

燈光歌壇



桜沢 っや子 選

横浜 宮田 昭

葉山 長島 博子

○唐突に「もう暫くだ」囁かれ縹渺の海のデッキ彷徨

○箱根より春一番の水かけ菜今年で終わりと書かれて
届く

○眼裏に幾多の離別浮かび来て一生の悟り会者定離とぞ

○鳴き声に雨戸明けければのら猫が家族顔して餌を欲し
とぞ

○今もなお船が傾く幻影に怯え訣別の思いをおそる
○なにゆえかわれは知らねど歌うたうああもう一度船
は捨てたしと

○膨よかに育ちしみかん皮をむくつゆはね返り香りた
ちくる
○三管の蘇鉄ゆたかに実をつけり油絵に画きし笑顔な
つかし

○古い先の事は思わぬと決めし夕べ港が見える丘に独
り涙す

○馬車道のいちようのこぼす銀杏はわが家の鉢に芽を
吹きいでし

評 退職を耳打ちされた衝撃、最後の航海となるのか、
デッキをひとり彷徨う姿がみえてくる一首目。今ま
でも多くの別れがあった。生者必滅会者定離の習
いのごとしである。もう一度、またもう一度船を捨
てたしと思うほど捨てることのできない思いの深さ
である。海に一生をかけた男の限りなく切ないロマ
ンを秘める。

評 たのしみになっていた箱根の水かけ菜、どういふ事情
かで終りとなるという寂しい一首目。家族のような
顔をしてすりよってくる野良への優しい二首目。実
をつけた蘇鉄はかつて友が油絵に画いたもの、友の
笑顔がなつかしく浮かぶという。三管に関わる作者
ならではの一首。

東京 しらたきよう子

○沈みつ 浮きつ 放浪す出版祝賀会壇上の揮毫注目
さるる

○香り高くみかん花咲く宇和島吉田山下亀三郎の故郷
は初夏

○潮騒に耳傾ける天安閣西陽は宇和島の蘇鉄も射貫く
○細字まで筆致確かな藩主の書白内障とは無縁の百歳

評 海運王といわれた伊予吉田の、がいな男、山下亀三郎
氏の著書『トランパー』の出版祝賀会。壇上の揮毫を

した書家である作者の一連。山下汽船の祖、山下亀
三郎の郷宇和島吉田は初夏、山にはみかんの白い花

が咲き甘い香りを放っている。蘇鉄をも射貫くほど
の強い日射しを眼下に眺める宇和島城天安閣。百歳

の藩主の書に感動した一連は書家の目で眺めている。

北九州 土谷 文夫

○戻りくる鮭もあるとふ遠賀川黒き流れの昭和を思う
○そっけない葉にぼんぼりのような花石楠花咲けりピ
ンクに群れて

○灯台の明かりつけむとカーテンを上げれば夕焼け明
日は晴れか

○気の向けば貝握り若芽を刈りし磯いつしか立ち入り

制限となる

評 遠賀川の上流には筑豊炭田があり石炭を洗う水が流
れこみコーヒー色の川でした。今は炭田がなくなり

元の清流に戻り魚がすみつくようになったそうです。
時の政策時代の流れには逆えないものです。三

首目、日中はカーテンをして直射日光からレンズを
護ったそうです。当時の灯台守の生活を生き活きと

詠いあげて余情に満ちた作品。出入り自由で大らか
な古きよき時代であったいつも豊かな自然の恵みを

いただいで私達の先達は生きて来られた。下旬に作
者の思いを見る。

近 詠

桜 沢 つや子

○むらさきの襲をまとひ天人峡の日陰に芽吹く露
のしゅうとめ

○無雑作につかみとりたる萌黄色天人峡の土手の
姫ぎみ

○咲ききりて花をさらせる露の臺天人峡の風に吹
かれる

2016 募集要項

テーマ

灯台のある風景

灯台絵画 コンテスト



2015 海上保安庁長官賞
奥川 司

応募資格 全国の小学生・中学生

応募締切 平成28年9月5日(月)
当日までに下記の応募先に必着

応募先

〒1105-0003 東京都港区西新橋1-14-9 西新橋ビル3F
公益社団法人 燈 光 会
TEL (03) 3501-1054 FAX (03) 3507-0727

応募方法

- ・作品は、未発表のオリジナル作品に限ります。
 - ・サイズは、A3・B3又はハッチ・四ツ切の画用紙とします。
 - ・画材は、絵の具(水彩)、クレヨン、パステル等消えにくい材料とし、鉛筆や木炭等は除きます。
 - ・作品の裏面に次の事項を記入してください。
 - ①題名
 - ②氏名(ふりがなが付記)
 - ③性別
 - ④生年月日
 - ⑤学年
 - ⑥住所・電話番号
 - ⑦学校名とその所在地
- (注) 郵送時、作品の傷みには十分ご注意ください。

応募上の 注意事項

- 1 応募者は、応募の時点で本募集要項に記載の諸条件に同意したものとします。
- 2 応募された作品は、応募を撤回された場合も含めてご返却いたしません。
- 3 応募作品の著作権・使用权は、(公社)燈光会に帰属し、応募者の承諾を得ることなく発表、展示、印刷及び頒布する権利を有するものとします。
- 4 当会が実施する過去のコンテストにおいて入賞した作品及び当会以外が実施するコンテストに応募中の作品は、このコンテストに応募できません。

賞

海上保安庁長官賞：賞状及び副賞(図書カード) 全作品から1名
金 賞：賞状及び副賞(図書カード) 各部門から1名
銀 賞：賞状及び副賞(図書カード) 各部門から2名
銅 賞：賞状及び副賞(図書カード) 各部門から5名

発 表

小学生低学年(1年から3年)・小学生高学年(4年から6年)・中学生の各部門別に審査の上、入選作品を決定し通知するとともに、当会ホームページにて発表いたします。海上保安庁長官賞・各部門金賞受賞の方は、東京で開催する灯台記念日の式典時(11月1日(火))に保護者同伴でご招待し授賞式を行います。



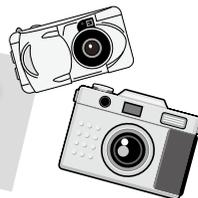
主 催 公益社団法人 燈 光 会

後 援 海上保安庁



写真募集のお知らせ

～これでどうだい(灯台)!～



燈光会では、当会の会誌である「燈光」の表紙、カレンダー、ホームページ、パンフレット、その他当会が実施する事業等に使用するため、灯台のある風景写真を広く皆様から募集いたします。

1 主旨

沿岸灯台、防波堤灯台、灯浮標など、航路標識の大切さの意識を高めていただくことを目的として、灯台等の背景に季節（風景、お祭り、イベント）感があるものや灯台を含む珍百景等、もっと身近な存在であることをPRするものです。

2 応募方法

JPEG形式（1MB程度）の電子データを添付ファイルとしてEメールでお送りください。住所・氏名（ハンドルネーム可）・撮影場所・撮影日・写真タイトルとコメント・連絡先をご記入願います。

3 応募資格

- (1) 応募者本人が撮影したものであること。なお、被写体に人物等が含まれる場合は、事前に写っている方の承諾や使用許可を行ってください。
- (2) 未発表の写真であること。
- (3) プロ、アマを問いません。

4 応募受付期間

随時、受け付けています。

5 注意事項

- (1) 立ち入り禁止場所、撮影禁止場所で撮影した作品、法律や公共ルールに違反した作品の応募はご遠慮ください。
- (2) 応募された写真、画像の著作権・使用権は燈光会に帰属し、応募者の許諾を得ることなく発表、展示、印刷及び頒布を行う権利を有するものとします。
- (3) 採用・掲載させていただいた場合には、薄謝を申し上げます。
- (4) 応募作品について、サイズ変更やトリミングなどの加工をする場合があります。
- (5) 応募作品は返却いたしません。
- (6) 応募の際にいただく個人情報、掲載のご連絡や掲載した会誌等をお送りするために必要な範囲で利用し、他の目的に使用しません。

6 応募先・お問い合わせ先（燈光会事務局）

Eメール：jigyo2@tokokai.org

電話：03-3501-1054 / Fax：03-3507-0727

「燈光会」ホームページ（<http://www.tokokai.org>）もご覧ください。

航 路 標 識 基 数 表

(単位：基)

区 分	平成27年度末
光波標識	5,196
夜 標	5,141
灯 台	3,211
灯 標	521
照 射 灯	142
導 灯	48
指 向 灯	17
灯 浮 標	1,202
昼 標	55
立 標	33
浮 標	22
電波標識	61
ディファレンシャルGPS局	27
無線方位信号所	27
AIS信号所	7
その他の標識	42
船舶通航信号所	35
潮流信号所	7
合 計	5,299

昭和三十一年七月二十五日
平成二十八年七月二十五日
第三種郵便物認可
（隔月一回五日発行）



「燈光」

七月号
第六十一卷
第四号